

放課後

コミュニテイ
vol.2



Another Story



「部屋に着くなり足でして欲しいって……」

「もうこんな硬くしてるし……」

千枝は少し呆れた様子ながらも自分の正面に座り足を伸ばしてくる。
足先が屹立したベオスに優しく触れる。

「大丈夫？痛くない？」

こちらの様子を見ながらさわさわと足の裏でベオスを包み込む。

千枝の足の熱がじんわりと伝わってくる。

ギミ

フニフニ

じゅ



「あっ、オナ○チン濡れてきた……」
千枝は足を絡めて器用「ペ○スをし」き始める。
「んっ、これくらいでいいの」「
足をゆっくりと上下させながら、ペ○スに刺激を加えていく。

ムネ
ムネ
ムネ

ムネ
ムネ

ムネ
ムネ



「アツアツの足……アツアツ」千枝は足の野郎の熱をさすかなんか、上アツな足でな〜回転させるやつ」野郎がしつてる。
「ん……足の裏濡れてささねちなよねちなよいってるこれす〜いエッチな感じ……」
ペ〇スの先から出たカウパーで千枝の足裏が濡れ、潤滑油代わりとなって動きがスムーズになってくる。

ゴク
ゴク



「これだけ濡れてればもう少し激しくしてもいいよね……」
そう言って足の上下運動を早めていく。湿った足裏がグチョグチョと
音を立てペ〇スを掻き上げる。
「……」が気持ちいいんだよね？」
千枝は魚頭を集中して攻める。足の指でカチカチを弾かれペ〇スが跳ねた。
「あっ♥……オチ〇チン、足の中でビクビクしてる……」
これ……私の足が気持ちいいんだよね？」
千枝は自分の脚技によって悶えている反応をみて
嬉しくなったのか、射精に向けて足の動きをさらに早めていく。

グチョグチョ
グチョグチョ
グチョグチョ
グチョグチョ



グキ
グキ

グキ
グキ
グキ
グキ



「うんうん……うんうんは射撃して」
ペ○スを挟む足に力が増えらる。
その刺激に耐え切れずに精液が迸った。
「あ……っ」
千枝の足の中でペ○スから精液が脈打ち出していく。

あ……っ
あ……っ
あ……っ
あ……っ
あ……っ

あ……っ

あ……っ
あ……っ
あ……っ
あ……っ
あ……っ

あ……っ
あ……っ
あ……っ
あ……っ
あ……っ

あ……っ
あ……っ
あ……っ
あ……っ
あ……っ

あ……っ
あ……っ
あ……っ
あ……っ
あ……っ



「まだ出るの」
射精が収まるまで優しくすり上げてくる。
飛び出した精液が千枝の足に掛かっていく。
「かなり出たね」
先っちょ攻めたのが良かったのかな

んっ
んっ

一度射精した後も治まっていないペ〇スを千枝の顔前に持って行く。
千枝は陰茎を見つめながら舌を這わせていく。
「全然治まってないし……いつもの事だけど」
多少の不満を漏らしながらも丁寧な舌使いで
ペ〇スを絡めとるように舐めていく。
「んっ……っ、は……ん」



「通り龜頭の先まで舐めると、先端から口に含み、ゆっくりと陰茎の根本まで、啜えこんでいく。」
「んん……ふっ……っんぐ」
千枝の啜内は熱を帯びており、ペ〇ス全体が溶けていくかのような心地よさを覚える。

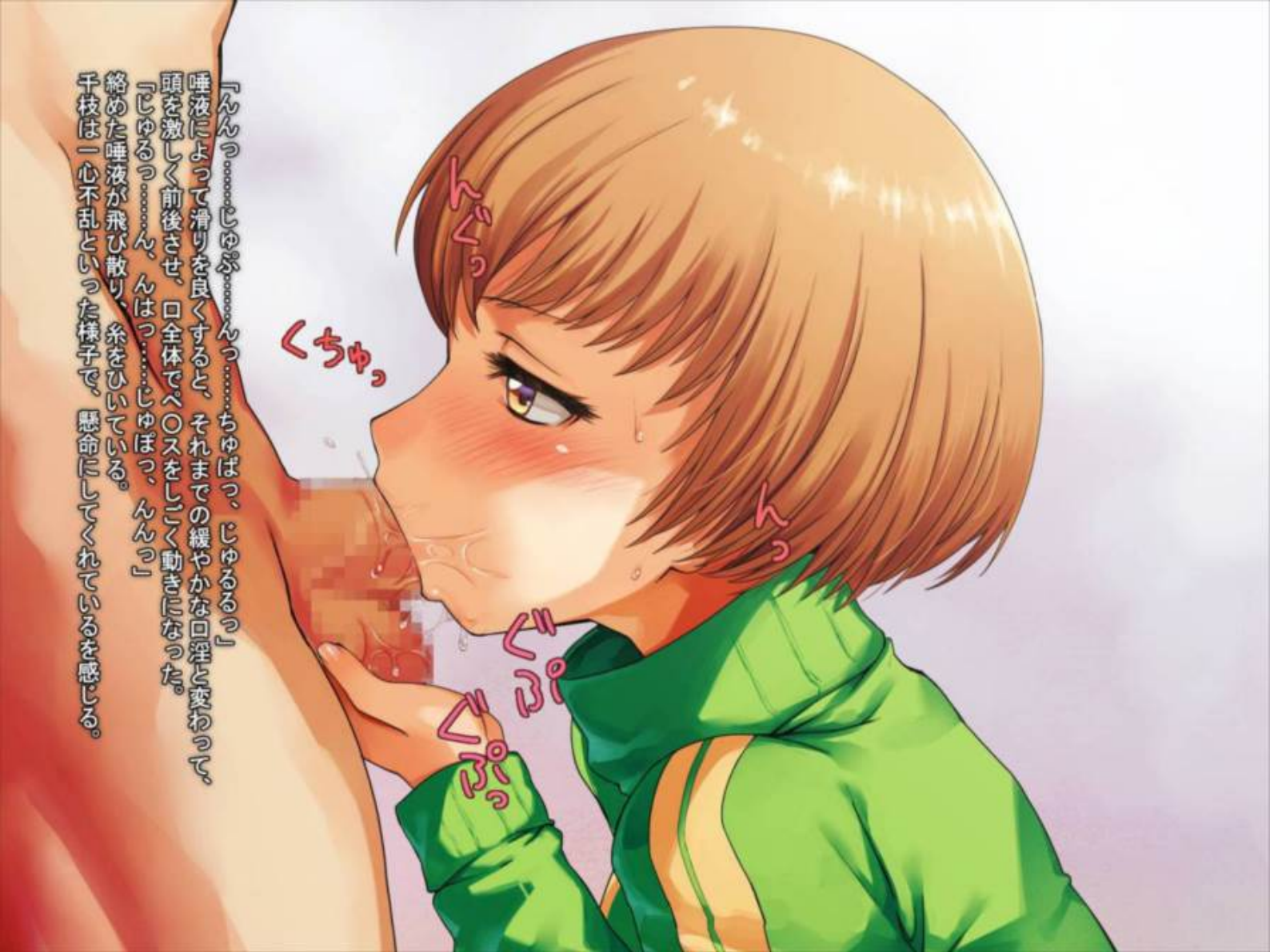
しゃぽ
しゃぽ

根本まで来た所で、千枝は啜えたまま再び舌を動かし始める。
舌を陰茎にそって回し、ゆっくりと味わうように満遍なく唾液をからめていく。
「はんっ……んぶっ……じゅるっ」





「んんっ……じゅぶ……んっ……ちゅばっ、じゅるるっ」
唾液によって滑りを良くすると、それまでの緩やかな口淫と変わって、
頭を激しく前後させ、口全体でペ〇スをしごく動きになった。
「じゅるっ……ん、んはっ……じゅほっ、んんっ」
絡めた唾液が飛び散り、糸をひいている。
千枝は一心不乱といった様子で、懸命にしてくれているを感じる。



「んんっ……じゅぶ……んっ……ちゅぼっ、じゅるるっ」
唾液によって滑りを良くすると、それまでの緩やかな口淫と変わって、
頭を激しく前後させ、口全体でペ〇スをしごく動きになった。
「じゅるっ……ん、んはっ……じゅぼっ、んんっ」
絡めた唾液が飛び散り、糸をひいている。
千枝は一心不乱といった様子で、懸命にしてくれているを感じる。



「んはあっ……ん」

しばらく激しく頭を揺らし続けた後、千枝はそれまで啜っていたモノから口を離し、大きく息を吸った。

「はあ……、はあ……、はあ……」

流石に息が続かなくなった様で、少し苦しそうに肩で息し、呼吸を整えている。

はあ、

はあ、

はあ、

べと、

ねと、

「んっ、どっどっ……口にするの、かなり上達したでしょ」
得意気に言う千枝に素直に頷いてみせると、想定と違う返答が帰ってきたのか、千枝の頬の紅みが増した。それを隠すようにして、そそくさと再びペ○スに口を近づけいく。



「はあ、……あ……はんっ……」
また先頭まで舐めてくると、今度は啜えずに、亀頭を執拗に舐めてくる。
「ココがイイんだもんねっ……んっ、ちゅっ……」
亀頭ののかりや鈴口に沿って舌を往復させる。
その刺激に思わず声が出ると、千枝は嬉しそうに「ちらを見て笑った。
「そろそろ啜えたほうがいいかな？」

再び啜え込むと先程と同様に頭を揺らし始める。
「じゅぶっ……、じゅ、じゅる……ん……ちゅぽっ」
啜えるときはゆっくりと、戻すときは唇で陰茎に吸い付くように前後させる。
さらに舌を使って裏筋を刺激され、射精感が高まっていく。
「んんっ……じゅぶ、……じゅるるるっ……はんっ」
千枝もこちらの状態を悟ったのか、動きを徐々に早めていく。

じゅぽっ
じゅぶっ

ぐぽ
んちゅっ♡

ぶっ
ぶっ



「んっ……うっ……っ、じゅぶ……っ」
「こちらが限界である」と千枝に伝えると、瞳で鎖ぎ、
それまでより、ぐっと深く根本まで啜え、強く吸い付いてきた。
その瞬間に耐え切れなくなり、千枝の喉奥に向かって射精する。
「ぶっ……ん、んっ、うぐっ……っ」

どくどく、
どくどく、

どくどく、
びくびく、
ゆるゆる、
どくどく、

千枝の口がぶくつと膨れ、その中にどくどくと精液を流し込んでいく。

「んんっ、んんんっ」

射精の勢いが強く、口の中に行き場の無くなった精液は喉の奥へと吞まれていく。
千枝は目に少し涙を浮かべながらも、射精が収まるまで耐えていた。



「ぶはっ、あっ……はあっ」
千枝はへ○スと呑みきれなかった精液を同時に吐き出す。
「はあっ……ふうっ……ふうっ……ふうっ……ふうっ……」
「はあ、もうっ……だしすぎっ、どろどろだしっ」
千枝の顔や髪にも精液が散っている。

「……良かったっ」
顔を上げ訊いていく千枝の頬を労うように手で撫でると、
少し恥ずかしそうにしながら、満足気に目を細めた。



「あっ……」

服を脱がせて千枝を布団の上に寝かせる。全体的に肌は上気し、汗を浮かべている。呼吸も荒く胸が上下し、千枝の体と気分もかなり高揚しているのが分かる。

あっ♡

はっ♡

どき♡

どき♡

あっ♡

「ああ……」
足を開くとピクツとして顔を背ける。千枝の秘部は既に少し濡れているようだった。そこに向かって口を近づけていった。



「あっ……だめ……」
両手で足を押さえて、秘部に口をつけると、
千枝は体を震わせて咄嗟に手でコチラの動きを抑えようとしてくるが、
手の力はそれほど強くなく、構わず舌を動かし始める。

「ああ……っ……ん」
割れ目に添ってスツと舌を走らせると、奥から透明な蜜液がどっと湧いてきた。
それまでの口淫や足姪で千枝の体も興奮していたようだ。



「んふう…あ…んんっ」
舐め続けていると、次第に、頭を押さえる千枝の手に力が加わり、腰をモジモジとぎこちなく動かし始める。



クリト〇スを攻めるのをやめ、膣の入り口を舌でなぞると、奥からさらに蜜液が溢れてくる。入り口をかき分け舌を潜り込ませていく。「んああっ…あんっ」

舌をドリルのように動かし千枝の膣壁を抉りながら奥へと進む。
「ああっ、それっ……いっ……ん」



イクッ

イクッ

千枝は背を反って震える。膣壁がキュツキュツと動き、
快楽を求めるように舌を締め付けてくる。
「はあっ、……いっ、いっ、舌気持ちいっ……」



ズ
チュッ

イクッ
イクッ

イクッ

ズ
チュッ

ズ
チュッ

イクッ
イクッ
イクッ

千枝が感じている様を見計らって、同時に指でクリト○スも刺激する。
「はあっ…あんっ、だめっ……そっっ、同時はっ…」
千枝の反応がさらに大きくなっていく。



腰がピクピクと震え、舌の動きに舐めが蕩けて、絶頂が近いようだ。
「んあ、もっっ……ああ、あ…あんっ」

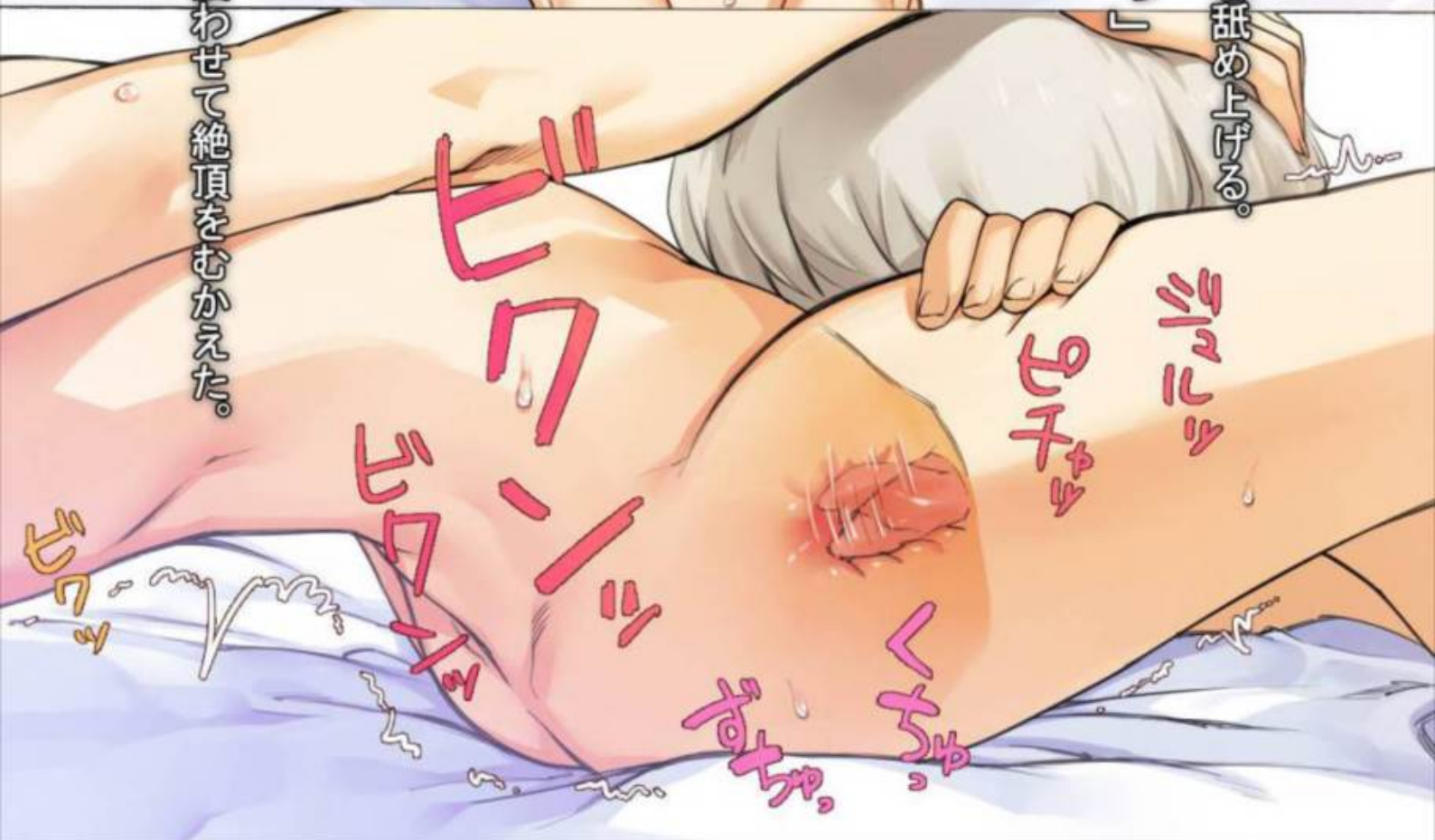


「だめっ…、あ、もう…んあっ…んっ！」
膣壁がグツと締まるのを察して舌でグリッツと膣奥を舐め上げる。

「んみっつっ、あ、あああっ——んっ」



同時に千枝が背を大きく仰け反り、ガクンツと腰を震わせて絶頂をむかえた。
「ふああっ、ああ、……あああ……」



「はあっ……、ふう……」
千枝の絶頂が収まるのを待って舌を抜く。溢れだした蜜液が長いアーチを引く。

は
は

は
は

は

ゴ
ク
ッ

ゴ
ク
ッ

ゴ
ク
ッ

ゴ
ク
ッ

代わりに再び硬く勃起したペ○スを秘部にあてがう。

「あ♥……」

蜜液がペ○スに付着し、割れ目に引き寄せられるように吸い付く。

「……いいよ、キテ……キミの大っきいので……」

千枝の膣中に先を挿入されると、奥へと招き入れるように残りの部分が飲み込まれていく。蜜液で濡れていた膣はすんなりとペ〇スを根本まで受け入れた。
「ああっ、ん…きたっ…♡」

千枝の中はかなり熱く、受け入れたモノを愛しそうにキューっとして強く締め付けてくる。
「んあっ…熱いっ…」



奥まで挿入すると、堪らず腰を動かし始める。

「あっ…、あん…、んっ…、はんっ…♥」

それまでの行為でカラダが出来上がっていた千枝はすぐに喘ぎ声を上げ始めた。

きゅん

あ、ん

ん

びゅん

は、ん

あ、ん

びゅん

ズン

ズン

ズン

きゅん

きゅん

「はあっ、あんっ…ああっ、深いっ♥…んあっ」
突きを強くすると、「シーツを掴んで」アスエイトをする。
「ああっ…あ、んっ、んっ」

次第に互いの動きがあつてきて千枝は腰全体でペ〇スを迎えてくれる。
「あんっ♥…はあっ…あっ…あんっ」
その動きに合わせるようにより深いところへと打ち込む。

「ああっ…ん、気持ちいい…はっ、んはあっ」
結合部から互いの混ざり合った体液が溢れだし、グチユグチユと音を立てる。



シーツを握る千枝の手に力がこもる。

「はあっ、もうっ……あ、中でおち○ちん膨らんでるっ……イキそう？
いいよ……キテっ、私もくるっ、イクから……！」
千枝の奥へ一際深く突き挿れた瞬間、膣壁がギュッと締め、ペ○スが爆ぜた。

あっ
ぐっ

「ああ、熱いのっ——んああああっ——」

膣の奥へと熱くたぎる精液を送り込んだ。

イクイク

イクイク

びゅるるるるっ

びゅるるるるっ

びゅっ

びゅっ

数十分後……

「ああっ♡、はんっ……あんう……あ、ああっ……すっいっ♡」
一度の射精では収まらず千枝を抱きかかえ、腰を振り続ける。

「は、あ……っ……あ、ふ……ん」
突き上げるたびに千枝も「ちら」抱きつき、耳元で吐息と嬌声を「ぼす」。
「はあっ……、ああっ……あ、んっ……あっ♡」



「あああつ♡……イツちやうつ、イクつ、ああ、つつ——」

二度目の射精を奥へと吐き出す。千枝も絡めた手足に力を込めて、吐息を漏らしつつ腕のなかでビクビクツと達する。千枝にキスをする、静かに目を閉じて吸い付いてきた。「んう……ふっ……ん、……んっ……っ」

は♡

あ♡

ビクツ

きゅ♡

あ♡♡♡

びく♡

きゅ♡

♡……

ビク♡

びく♡

ビク♡

はあ……、はあ……、はあ……んっ……」
抱き合ったまま、しばらくの間互いの熱を感じ合う。
千枝の顔を見つめると、微笑みつつ見つめ返してきた。

はあ

はあ





チャプター2
外でのトレーニング後



「ちよつ、だめっだってば……」
日課の土手での特レーニング後、木陰で体を休めていた千枝の背後に座り服を開けさせる。火照った体が汗で濡れ、蠱惑的な姿をしている。
「こらっ何考えてんの……っ」
突然の事で千枝も抵抗してくるが、特レーニングの疲れでうまく力が入らない。
「ちよ、もう……誰か来たらどうするのっ」
体をよじる千枝の脚を開く。スカートの下からスパッツが現れる。
「やっ……バカバカッ、ストップ！」
焦る千枝を尻目に股間の中央に手を伸ばしていく。

むあ。

くはっ



千枝のソコに手を触れると既に軽く湿っていた。
「ち、違っからっ……これはそんなんじゃないやなくて、汗、汗だからっ」
千枝は頬を赤らめながら弁明する。
湿った肌とスパッツがびっちょりと密着して千枝のカタチが浮き出ている。
「うっ……やだあ……」
浮き出た割れ目に沿って指を動かす。
「ん……っあ……っ」

スリ
スリ



指を動かしていると徐々に湿り気と蒸れ具合が増してくる。
「んっ…もう信じらんないっ……、ヘンタイい……」
千枝はそう言いながら抵抗を諦めたようで、手足の力を抜いて
体を預けてきて、代わりにどことなく身をよじらせ始めている。
「んくっ……あ、んん……っ」
千枝の吐息に甘い声がまじりだす。



千枝のアソコがほぐれてきたのを確認してスパッツの布ごと指を挿入する。
「ああっんんう……………」
千枝は感嘆の声を漏らす、指は抵抗なくぬるりと入った。
「ああ……………これっ……………あんっ……………」
スパッツの布越しの感触は、直の感触と違い、濡れた粘膜と
スパッツの肌触りが相まって又メヌメとしていて、返って生々しい。
「あっ……………なにこれ……………ん、はあっ♡」
千枝の方もいつもと違う刺激を感じている。

まよあ♡
んっ
びびび
ぬふっ
しゅゅ ちゅゅ



「いうっ……んあ、あ……」
指を深く出し入れするとクチュクチュと粘液の音が大きくなる。
「ん、あっ……ああ指い……くふっ」
中で指を鉤状に折り曲げ膣壁をグリッと擦り上げる。
「ふああああっっ……んうっん……っ、だめえ……っ」
千枝は思わずあげてしまった大声を抑えようとするが、
構わずさらに指の動きを大きくする。
「んふう……んっ、うあ……んんうっ、はっ……」
堪らず吐息が漏れ、スパッツの染みがどんどん大きくなる。



「もう、だめっ……あ、きちゃうっ」

千枝の言葉を聞いて、さらに指を激しく動かす。

「あああっ♡、んんっ……あんっ、ク、ううっ♡……イクっん」
ヒクヒクと蠕動する膣内で激しく指を上下させる。

「あああああっあっ——」

千枝が叫ぶと同時に腰が震え膣内がきつく締まり、一気に決壊する。

「ああっ、はあっ♡、ああ、んっ……はあっ、はあっ……」
千枝はヨチラにもたれ掛かって、空に向かって息を吐いた。

ぴゅっ
ぴゅっ

人気がない林に入り、挿入のため千枝を抱きかかえると誤って服の中に頭が入ってしまった。

「ちよ、ちよつとなにしてんのアンタは!?!」

びっくりした千枝が慌てて頭を出そうとするが、うまくいかない。服の中は千枝の温もりと匂いに満ちており、存外心地が良い。

「ちよつ、匂いって何!? やだやだ早く出なさいっての!?!」

焦った千枝が頭をホカホカ叩いてくるが、あえてそのままの状態

千枝の腰を抱え抽送を開始する。

「やっ、やだ! こんなのダメ! これじゃまるつきり変態じゃん!」

その言葉を無視し、先ほどの愛撫で濡れている秘部を突く。

「こらあつ、人の話を聞きなさいっ……くうっ、ん……っ」

千枝は抗おうとするが、腰を突き上げられると体が反応してしまう。

「もっつ……やだっ、んっ……く、ああっ……バカあ……っ」





すっ
ん

ちゅ
んちゅ
んちゅ

れ
れ

ず
ぶ
ず
ぶ

ゴキョ

次第に千枝の反応が甘いモノに変わってくる。
「んっ……はっ♡……あ……ひあっ♡……」
服の中で目を開けると、目の前で千枝の形の良いおっぱいがブルンと揺れており、堪らず乳首へと舌を這わせた。
「んあっ、おっぱい、乳首っ、あっ、ああっ♡……ふうっ」
乳首は既にかたく、舌先で転がすとコリコリと程よい弾力を返してくる。
「はあっ、乳首と……オマ○コっ、同時は♡、ダメッ」
乳首を舐める度、下の方もキュッキュツと締め付けてくる。



あ、♡

ん、♡
ん、♡

ん、♡
ん、♡

ん、♡
ん、♡

ん、♡
ん、♡

ん、♡

乳首を口に含み、吸い上げると千枝の嬌声があがった。
「んうっふうんっ……っ」
千枝の体が小刻みに震える。
「あんっ……ああ♡吸っちやダメ……からだ、ソクソクするっ」
同時に腰の突きも強くする。
「ひゃ、あっ、ん、ああんっ、……ふうんっ」
パンパンと小気味よく腰を振ると腰に回した千枝の脚が、
体を支えようとしてギュツとしがみついて来て体が密着する。



カリッ

ビクッ
ビクッ

はっ

ビクッ
ビクッ

んん

んん

ビクッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

「はあっ、あっ私も気持ちいの来るっ……イクッ、イクイクッ
おち〇ちん来てっ……そのまま、奥にっ……きてえっっ」
ペ〇スで千枝の最奥を突くと同時に乳首に噛み付いた。
「んんうっっ、イクウっっ」

電流が走ったように千枝の体が跳ね、中で射精する。

「んはあっ、……あ……ナカに……」

全身を強張らせ、震える千枝を抱きしめ、二人で
木にもたれかかる。

「はっ……ふっ……んっ♡」

少し休むとペ〇スが完全に復活する。それを見た千枝が目を見張り言う。

「だめっ、もうダメっ……これ以上はムリっ！」

それでも木に囲まれて逃げ場のない千枝に迫って行くと、

「ああもうっ、分かった、分かったから……でももう、外でするのはやめよ？ 続きはキミの部屋がいいなあっ、キミの部屋で、ねっ？」

と、小動物のような瞳で必死な願いを込めて見つめてきた。

数十分後……

「んあっ、やあっ、だめ、イクツ、またイクイクっ、あああっ」

目の前にある千枝の引き締まった尻ががくがくと震える。
「はあっ、はっ、また私だけいっっちゃった……」

外から帰って休みもせず体を重ね、千枝がこれで何度目かの絶頂を迎えた。
「はあ……はあ……、ちよっと待って、今だめ……」
千枝は半ば腰砕けで、支えないと足元もおぼつかない程になっている。
「はあ……んっ、体中ビリビリってしびれてる……」



千枝が少し落ち着くのを見計らい、腰の抽送を再開する。
「あんっ……また……うん、んんっ」
腰を打ち付けると、振動が波になって千枝の尻肉を揺らす。

腔中も愛液で熱く溶けそうなほど絡みついでくる。
「はあっ……、おち○ちん、熱いよっ……ん、ああっ」
手のひらで千枝のおっぱいを「ねながら腰を突く。



あ

はっ♡

んっ

もみ

もみ

ぽん、

ぽん、

ぽん、

ぐちゅっ

ぐちゅ

壁に手をついて体を支える千枝を後ろから攻める。

「ひあつ……んんっ……くっ、強い……」
千枝の股は脚に滴るほど濡れており、突くと愛液が壁や床に飛んで行く。

「あんっ……だめっ、ああっ……激しい、のっ……」
千枝も自ら腰を振り、ペ〇スを迎えに来る。

はっ

あっ♡

たぶ

たぶ

はんっ

すぼんっ

はんっ

ぢゅ

ぢゅ

「あああっあああっ

」

あ、

あ、

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ

絶頂し背を仰け反る千枝に圧されて膣内に熱く滾る精液を放出する。
「ああっ、んああっ……はあ、ん、っふう……」
絶頂で全身の力が抜けた千枝がそのまま床にペタンと倒れこむ。
「はあっ……あっ……はう……はあっ……」



絶頂の余韻で恍惚とした状態の千枝を布団に連れて行く。
「うっ……はっ……んっ」
胡乱な目つきで力なく手足を投げ出している。
腰を引き寄せ持ち上げると、膣内に射精した精液が逆流してきた。
「っっ……」
千枝が疑問の表情を回ってくる？

は
は
は
どろろ



千枝の前に依然として硬く屹立したままのペ〇スを持ち出す。
「へっ……っ？」

驚きの声を上げる千枝。しかしまだ事態を把握できていない。
ぼうつとした頭で理解が追いつかない千枝の入りにペ〇スを
ぐりぐりと押し当てる。

「ま、まだするの……」
「……」

千枝は涙目になりながら逡巡した後、
「これで……最後だからね？」
と小さくこぼした。

ぐきゅ

ゴクッ

ゴクッ

千枝の許可を得た」とで、そのまま勢い良く挿入する。
「はあああつ………」んなつ、奥にっ、刺さるっ………」
持ち上げた腰の上からのしかかる様に挿入されると、容易く膣奥に到達した。
膣内からこれまでの愛液や精液が洪水の如く溢れた。
「んはっ………っ………ああっ………っ………」
絞り出された声が、千枝の心身が完全に蕩けきっていることを物語る。



「ん……………ひゅ……………あッっっ♡」
腰を打ち付けると、か細い吐息のような甘い声が漏れる。
さすがの千枝もイキ過ぎて、まともに反応が出来なくなっている。
しかし、快感はしっかりと感じていて、膣内の方はこれまでとは比べ物にならない程に熱くうねり、ペ〇スを愛しそうにキューツときつく締め付けてくる。
そのギャップに思わず胸が熱くなりペ〇スがさらけにみなぎる。
「あ……………ん……………熱いいっ……………」





熱く、快感の坩堝と化した瞳を突いていると、股間から
抗いようのない射精感が昇ってくる。


「あ……おち○ちん、……イキそうになっているっ……」

千枝が敏感にコチラの状態を察知する。

「きて……残った精液、全部っ……私の中……」

千枝にありったけの精液を注ぐべく腰を動かす。

「ぶっ……んっ……あ、ああっ……っ」「



少し落ち着くと、千枝は
「おつかれさま♥……」
とだけ言っ、眠ってしまった。
スウスウと寝息を立てる千枝を片腕で抱き寄せると、
子供のようにピッタリと寄り添ってきた。
温かい充足感を感じ、目を閉じた。



チャプター3 千枝ちゃんのお胸にぶっつけよう！

「普段から変態だ変態だと思っていただけ、まさか腋でしたいなんて言い出すとは思わなかったわ……」
トレーニング後の千枝に腋だけ露出してもらう。

体中汗だくで、腋も汗で蒸れ、甘い芳醇な匂いも漂う。
「か、かつ、嗅ぐなあっ！」
千枝が恥ずかしそうに声を上げ、羞恥心で顔を真っ赤にする。
その様子を見てしているとペコスがみるみる勃起していく。



ムシッ

ムシッ

どき、

どき、

じゅっ

じゅっ

ペ〇スを左腋に押し当てゆっくりと上下する。
「熱っ……うう、こんなに大きくなってるし……」
千枝の腋はなめらかな肌でそれが汗で濡れ滑りが良くなっている。

ペ〇スを押し付けるとふにふにと柔らかい肉が押し返してくる。
「うう……出すなら早くだしてよお……」
千枝は恥ずかしがるが、羞恥心を感じるほど肌がじっとり濡れていく。

むっ
むっ

あ

ん

ぬーっ

っ

ふっ

どき

どき

ぬーっ

その内に、限界に達し腋に直接射精する。
「うぐっ、熱い……精液、火傷しそうなほど熱いっ……」
千枝は腋で精液の熱を直に感じ、腕をピクピク震わせる。
射精した精液をペ〇スで腋全体に塗りたくる。
「うう……ヌルヌルするう……」

びん

どろろ

どろ

どろろ

どろろ

どろろ



先程まで綺麗だった千枝の脇が精液で白く染められる。
「こんなに出してえ……」
精液のへばりついた自分の脇を見て千枝はたじろぐ。
しかし、少なからず千枝にも興奮の色がみてとれる。



どきどき

どきどき

おっ、おっ

おっ、おっ

おっ、おっ

おっ、おっ

今度は千枝の右脇にペ〇スを押し付ける。

「ひえっ？こっちにも？」

千枝は一瞬驚いたが、次の瞬間、顔を赤くして怒りの表情でキツと睨みつけてくる。

「くうっ……ホントバカっ、変態変態変態変態っ！！！」

タラッ

どろっ

どろっ

どろっ

くっ

ぐっ

くちゅ

ぐり

千枝は大声でコチラを罵ってくるが今の状態ではん、むしろ興奮材料となり、ペ〇スにさらに熱が込められる。「ふうっ……変態い……」コチラの全く堪えていない様子を見て、千枝は諦めて俯く。

今度は自分だけでなく千枝にも動いてもらって腋を擦る。
「ふっ……ん……く……っ……」
さつきよりも汗の量が増え、滑りが良い。
千枝の腕から流れてきた汗がペ○スに伝い、滴り落ちる。
「っ……あ……ん……っ……」



二度目の射精を腋にぶちまける。
「んはあっ……ん、はあっああ……っ」
腋に留まりきらなかった精液が周りにも飛び散る。
「んっ、熱いの……いっぱい……」



ズンズン
ゴキョウ
ゴキョウ

ゴキョウ
ゴキョウ

ゴキョウ
ゴキョウ

ゴキョウ
ゴキョウ

はっ

す

千枝の両脇にべっとりと白濁液が絡みついている。
「うう……もう体中ベトベトっ……!」
納得がいかないと憤る千枝に劳いの言葉をかける。
「嫌味か!絶対あとで肉奢ってもらうからね!」

むゅ

どろ

承諾の返事を返し、ひとまずお互いに体中のいろいろな体液を
洗い落とすため、一緒に風呂に入ることにした……。

どろ





チャプター4

ある休日の午後

(所持ヘルソナ…マール)

「あんっ♥……あうっ、んんっ……気持ちいいっ♥」
眼下で千枝が脚を開き、ペ○スを膣に受け入れている。
「もう何回もしたのに……またおち○ちん硬い……っ」



千枝の周りには使用済みのコンドームが既に幾つも転がっている。
用意していたものは全て使ってしまったため、生での挿入になっていた。
「ひ、ああっ……やっぱり生だとおち○ちん、ゴリゴリってオマ○コの中
挟ってきて……全然違っっ……はんっ♥」
千枝が嬉しそうな艶声を上げる。

「あああああっ」

千枝の中に射精する。ペオスが何度も跳ね、膣奥に精液を吐き出す。
「ああっ……中でおち○ちんいっぱい、ビクビクって……っ」



千枝がふと転がっていたコンドームをつまみ上げる。
「これが……」んをいっばい私の中に入れて来てるんだ……」
精液で膨れたコンドームを眺めかしい目付きでしみじみと眺める。

射精後も抜かないままで呼吸を整える。
「はあ……はあ……」
その間、悪戯っぽく千枝の首にキスをする。
「あつ♡……ちよつと、あんつ……あははっ、やだっ」
それまでの行為で千枝の体は全身が感じやすくなっており、
首でも快感を感じる様だ。



何度もキスをしていると腫のほうがかきヒクヒクと伸縮してきて、
そのゆるやかな刺激でペオスが段々と勃起してくる。
「あ……また……」

気が付くと部屋の外は真っ暗になっていた。

「あ……っつ、……ひう……んっ」

千枝は空ろな瞳で息も絶え絶えになっている。瞳からは大量の精液が流れたし、布団に染み込んでいる。

「もう……ムリ、これ以上……イケない……っ」

朦朧とした意識の中でうわ言のように呟く千枝。



びくん、

びく、

どいぶい、

どいぶい、

びく、

は、は、は、

は、は、は、

てろっ

てろっ

肩を抱んで揺すりながら名前を呼ぶ。

「……あ、良かった。気が付いたんだね……」

微かにコチラに反応した千枝は、一言言い残すとカクツと眠ってしまった。

このままにしておくのはまずいと思ったが、凄まじい脱力感に襲われ、

眠気に誘われるままに目を閉じてしまった。

翌日、めっちゃくちや怒られた。





マリー編

「んっ、入った♥」
マリーの尻がペ○スを飲み込みながら下りてくる。
「今日はキミは動いちゃダメだからね。いつも
攻められてはっかで悔しいから私がしてあげる。……んっ」
マリーの膣中はずでに熱くうねっている。
「安心して。ちゃんと気持よくするから。」
と、ニコリと小悪魔めいた笑みを向けてくる。



「じゃあ、次は縦に動くから」
そう言うと即座に腰の動きをスライド運動からピストン
運動に変え、激しく腰を上下に振り始めた。
「あんっ、ん……やっぱり、これもイイかも……」
マリーの尻が腰に叩きつけられ、
パンパンと肉のぶつかる音がする。
「う、あんっ……じゃ、もっかいグリグリっ」
また、マリーが尻を押し付けグリグリと横に動く。
腰の動きを縦と横で何度も使い分けながら快感を高めていく。



気持ち良くなってきた所で思わず腰を突き上げる。
「あっ、あんっ、……キミは動いちやダメって言ったのになん、ひうっ」
一度動いてしまうと抑止が効かなくなる。
「はんっ、あっ、うんっ、あんっ……やめっ、ん」
マリーは戸惑いつつも、しっかりと腰の動きを合わせてくる。
「あん、ひやんっ……おち○ちん、奥にクルっ♡」

あ、

あ、♡

あ、

あ、

あ、

あ、

あ、

あ、

あ、

あ、

あ、

湧き上がってきた快感に耐えられず射精する。

「ああっ、きたっ、ああ、んんんっっっ」

マリーの膣内もプルプルと震える。

「はあ……、熱くて気持ちいい……」





ぷりっ
りっ
んっ

マリ

どき

か
ー
う
ん

ん

ん

「このカッコすい恥すかしいんだけど
……」
マリは仰向けで脚を自分で抱えて、腎
部をまるごとコチラに突き出す格好を
している。
ムッチリとした肉付きで、白くきめ細や
かな肌が汗で濡れている。
「じろじろ見ないでよ……ばかきらいへ
んたいえっち」
マリは頬を真っ赤にして俯く。



尻肉を両手でがっしりと掴む。柔らかい肉に指が沈んでいく。

「あつ……」

マリリーの視線がはち切れんばかりに屹立したペ○スを捉える。

マリリーの入り口は両足でびったりと閉じられているが、ペ○スをあてがうと、物欲しそうにヒクヒクと動き出す。

押し込むと中から一気に愛液が染み出てきた。

「ああつ……入って、くうっ……んんんっ……」

掴んでいた尻が細かく震える。

がしっ

あ

んんん
んんん

んんん

んんん

んんん



根本まで挿入すると、すぐに抽送を開始する。
「んんっ……んっ、ひん……んあっ、いきなり強いっ」
脚を閉じているためか膣道はかなり狭く、腰に力を込めて押し広げるように突く。
「はあんっ……あっ……ん、くうっっ」
マリーは脚をしっかりと抱えて激しい腰の突きに耐えている。
「あっ……く、奥まで来るっ」

「んん」

「んん」

「んん」

「んん」

「んん」

「んん」

「んん」

「んん」



あぁっ

あぁ

膣から蜜液が止めどなく流れ出て、腰を打ち付けると滴となって飛び散る。
「はっ……あっ……んっ、あんっ、おち○ちんズンズン来て、イキそう、このままっ、イキそう……っ」
「マリー」の締りが強くなり、腰の抽送を速める。
「あんっ、いい、気持ちいい、……きて、来てっ、このまま射精して私のおま○こ気持ち良くして……っ」
さらに奥へと届くように腰の突きを強める。
「あぁっ、クツ、イクツ、来る、来るッ——」

ほんっ

ほんっ

ほんっ

くちゅっ

くちゅっ

ほんっ



「はぁあぁっ、んんんっっっ」





精液を出しきってからペ〇スを引き抜く。

「あ……っ」

ゴブツと音を立てて中から精液が逆流してくる。

「あっ、いやっ……見るなあっ、ばかきらいへんたいすけへ……」

その音が恥ずかしかったのか、マリィが真っ赤になって怒る。

ゴブツ

あっ

ばかきらい

ん

ん

ん

ん

ん

体位を変え、今度は後ろからマリーを突く。
肉付きの良い尻が震え、尻穴までよく見える。
「ふあ、あんっ……ん、あはっ」
マリーは自分から腰を振り快感を感じている。
その動きに合わせて、腰を突き出す。



「私の隆中……気持ちいいイイ？」
唐突に後ろを振り向いてマリリーが訊いてくる。
素直に気持ち良いと答える。

「あはっ……嬉しいっ、もっと、もっとと言って」
嬉しそうな笑みでせがんでくるマリリーに何度でも応える。

「んんっ……いいっ、私も気持ちいいっ、キミがシてくれると、嬉しくていっぱい気持ち良くなれるの、……だから一緒に、もっと気持ち良くなりたい」
マリリーの期待に応え、さらに深い所で繋がるうと腰の抽送を深める。
「んああっ♡、あんっ、ひあっ、……いいっ♡、気持ちいいっ」

んんっ

あっ♡

んんっ♡

んんっ

んんっ

んんっ

んんっ

んんっ

んんっ

んんっ

んんっ

んんっ

「はあっ……はあっ……」
絶頂の余韻でマリーの尻が震える。まるで射精した精液を
呑み込むかのように膣道が蠕動し、その刺激に思わず腰が震える。



片腕でマリーの細く、しなやかな腰を抱えペ○スを打ち付ける。

「はあっ……あ……ん……ふっ……」

マリーが熱く吐息のような嬌声を上げる。

言葉を交わさなくとも、重ねた肌から伝わる熱で互いのことが伝わる。

「ふあっ……あっ……ん♡」

握り合った掌に力がこもる。



射精感が込み上げてきて、マリーを強く抱きしめる。

「ああっ……………いいよっ、きてっ……………」

マリーが腰に回した脚をがっしりと締める。

その刺激に押されて精液が中で弾けた。

「んああっ、ああああっ……………」

マリーが背をを仰け反り絶頂する。



「はぁっ……、はぁ……」
マリーの中で最後の一滴まで射精する。
「……どうだった？」
マリーがまだ恍惚とした表情で訊いてくる。
何も言わずキスをすると、静かに吸い付いてきた。







ニハハ
♡

ニハハ
♡
ニハハ